

片山一道著<考古学と身体史観-古人骨から探る日本列島の人々の歴史>先生「私は骨屋」とおっしゃる。読み終わって「なんだかピンと来ない これは何だろう この先生 フィールドワークを重んじてこられた 骨をいくつもいくつも 見てこられた 見んと わからんぞ 理屈じゃないぞ」ということなのかなあ。

先生“はじめに”書いておられる。普通の日本の歴史は、文化や社会や民族や文字、あるいは歴史に名を遺した人物の事績の歴史が日本の歴史。それに反し、本書は、日本史を実際に担ってきた人々の実像をリアルに理解してもらう、日本人とは何か、歴史とは何か、人間の営みとは、そんな哲学的命題を涵養してもらいたい。画家のゴーギャン、傲岸、粗野、横柄な人物であつたらしいが、自伝“ノアノア”で「我々はどこから来たのか 我々は何者なのか 我々はどこへ行くのか」という問いを投げかけている。なんと画家の名前が出た、うれしく読んだ。

◎最初の日本人は、7~8万年前の氷河期、陸地を歩いて渡ってきた。それ以前の原人類はいなかった。

◎縄文人は何でも屋。採集、狩猟、漁撈、園芸。定住生活が多かった。土器類が生活の屋台骨、煮炊き、祭祀、納棺。

◎旧石器時代人・縄文人は広く東アジアの大陸部から、吹き溜まりのように集まり、独特の身体特徴が育まれた。

◎貝塚はゴミ捨て場ではなく、生活空間、墓所（骨にやさしい土壌なので、人骨が残った）、儀礼の場（土偶や人面）

◎縄文人が死者を貝塚に埋葬した。おかげで、貝塚や石灰岩地帯では骨は質感のある状態が保たれる。逆に、火山灰性の酸性土壌の日本列島では、動物骨は土中で腐食、分解、溶出してしまう。貝塚以降、骨が出にくい。

◎縄文人は死者を屈葬した。○わざと折り曲げ、蘇っても悪さができないように。○子宮回帰を願う姿勢。○宗教的意味。○穴を掘る作業が大変なので、体積を小さくした。（縄文人の美学のわからないやつと叱責されたとか）

◎縄文人の頭骨。頑丈、剛健。凸凹のメリハリが強く、彫りの深い顔。歯並びがよく、異常にすり減っている。抜歯をしている。骨格から蹲踞姿勢（ウンチスタイル：かかとを地面につけ足首で全身をささえる）を常習していたらしい。これは現代日本人にも受け継がれている。縄文人は山あり谷ありの野山を駆けめぐる筋骨が発達していた。

◎今の日本人と比べ、背が低く、頭でっかち、頑丈な豆タンク体形。犬は狩猟の伴侶だった。

◎骨格以外の身体特徴、耳、頭髪、眉毛、髭、体毛、唇、瞼、皮膚の色、乳房、尻の大きさ、彫り物などはわからない。

博物館等で見られる複顔像は、想像の域を出ない、あまり信をおいてはいけない。<ジオラマはダメですか・・・>

◎縄文人も現代人も魚好き。高水準の漁撈生活。クジラ、イルカ、魚類、鳥類、貝類。世界でもトップレベルの海の民。

◎先生、千人分ぐらいの縄文人骨の外耳道骨腫を見つけた。素潜り、海藻類採取、波かぶりのできた「サーファー耳」

◎日本列島に、たった20万人の縄文人。何でも屋の彼ら、豊饒な風土の資源を最大限に利用、けっして過酷な生活ではなかったのでは。日本語の起源は縄文語。世界に類を見ない複合語、音韻的にはオーストロネシア、語彙的には極東アジア、文法的にはウラル・アルタイに類似するとか。

◎弥生時代、藤の木古墳（6C後半）、キトラ古墳（8C初）の話は書くスペースがなくなった。

人口●縄文（1万年以上）20万人 ●弥生（3千年）50~200万人 ●平城・平安時代（500~700万人）

●近世1200万人 ●明治3300万人

最後に明石原人の話、このての話、捏造の話は俗っぽい。オレにはよくわかった。

“明石原人”とか“高森原人”今から70万年前~20万年前、前期旧石器時代、後期旧石器時代のころから日本列島には人類の仲間が住んでいた。中国大陸にいた北京原人のごとき人類が日本にも分布したというわけだ。そんな常識、定説があった。現代の日本国民にも、自分たちの祖先が遠くまでたどりうることを誇りに思う意識があるようだ。

“明石原人”の名は敗戦後の疲弊する社会を舞台に忽然と現れた。1931年に人骨の断片が発見された。当時在野の化石研究者博士の言葉が朝日新聞の記事に踊っている「三、四十万年前の人体骨盤の立派な化石」「直立歩行のできる人類 あるいは高等猿類の成人の骨盤」この話はこれで消え、実物も空襲で失われた。ところが、戦後東大の権威教授がその骨の詳細模型、写真等を見「北京原人とほぼ同期 明石原人と命名する」という論文を書き、教科書に載り、オレも含め万人の知るところとなったが、「これは違う」「これは怪しい」という研究が相次ぎ、消え去った。

“高森原人”旧石器発掘捏造は2000年の毎日新聞の記事で「自ら埋めた 魔がさした」で幕が下りたあの事件。

一か月前、パソコンのOSを7からWindows10に変えた。「1年間バージョンアップが無料です」というキャンペーンが去年の夏からあり、気の早い人たちはさっそく変更していたが「半年以上待った方がいい どういうトラブルがあるかもしれない 半年も経てば トラブル対処が終わっているだろうから」という物知りたちの話を聞き10カ月めにはいって変更した。物知りたちが変更し終わったかは知らないが、心配をよそにすべてが順調に一カ月が過ぎた。一番心配していたのは、Windowsと相性の良くないAdobe系のソフトIllustratorとPhotoshopが作動してくれるかどうかが一番の眼目だった。変更後一番に動かしてみたが何の問題もなかったので安心をしていた。一カ月ほど経った時に音声を聞こうとして困った。「音が出ない」「そういえば 起動時も 終了時も メールが来ましたよ という時も まったく無音だった」10に変更した人が、ネットでそういうことをいっていたということ思い出した。色々試みて不安定ながらも音は出るようになり喜んだ翌日に、また音が出ない。色々なところ、左右のクリック、なんだかだ試みることによって、パソコン自体の色々もわかってきた、「パソコンという機械 いまだにほかの電気製品と違って 昭和期の家電そのもの 扱いがむづかしいのだ」というように理解している。

オレはICレコーダーを愛用している、安威川の河原で走るとき、山に登って歩いているとき、こいつのスイッチを入れ、ぼそぼそ録音している。最初はパソコンから自分の声が流れるのは、気恥ずかしいものだったが、紙に走り書きするよりは、ICレコーダーが気軽に簡単だと多用している。この音が聞けない、オレの声が出てこないとわかってびっくり「何とか修繕しなくては」とネットで「10の音が出ない」を検索すると、みなさん困っているようで、対処方法がたくさん出てきた。Windows側にすれば「何をそんな初歩的なことを」ということなのか、簡単に操作を教えてくださいのページがあるが、そんなことでは簡単に音が出ない。フリー（無料）のソフトでなんとか音は出たが、音も小さく画像も汚いという不満のソフトだった。何度もさわっているうちに何が功を奏したのか、わからずじまいながら、大きな音、きれいな画像が復元した、と喜んでいたら翌日には元の木阿弥、こんなことがいまだに続いている。以前はスピーカーでも聞けたし、イヤホンでも聞けた。

さてここからICレコーダーで録音した、安威川を走りながらのぼやき節である。7月に入ってなんにち、三四日雨が降っていない、今の季節の晴れの日、暑さは夏。昼間はとて走れないので夕方か夜に河川敷にやってくる。今は午後4時半、夏至が終わったばかりでまだまだ日が高い。陽の明るさ暑さは昼間の続きとはいえ、水の上を渡る風が幾分冷気を含み気持ちがいい。ただ紫外線はきついようで、顔が手足が浅黒くなってきている。わがアトリエの床は焦げ茶色、そこに手をつくとなんと同じ色「オレの顔は こんな汚い色か」と驚いた。飲むとキヌサンが「下品な 日焼けだ」とぬかされる。夏以外の季節は昼飯が終わると毎日ここに来る。それが夕方とか夜になると、数時間ずらすだけだが、身体の慣れ、習慣の慣れ、思考の慣れが邪魔して、昼飯が終わって何をすればいい、食べ過ぎるとよくない、晩飯前後の割り振り、腹のすき具合との相談、様々な仕様もないことで悩んでいる。

前回の骨の先生の話の続きを思い出しながら走った。驚いたのは人口の話。縄文時代が20万人。弥生時代が200万人。平安時代が700万人。こんなに数字が小さいのかと驚いた。縄文時代の1万年の間、20万人と人が「産まれては死に を 繰り返していた」人の生命というよりは、生物の生息というように思ってしまった。それにしてもあの土器・土偶はすごい。弥生時代は人口も一桁増えて200万人だそうだ。縄文時代は貝塚の中に埋葬したので化学的に骨が残ったが、弥生時代以降、日本列島の火山灰土壌の中では骨は溶けて消えてしまうらしく、形よく残っているものがほとんどない状態らしい。それでも弥生時代の出た骨を調べると、石器・鉄器の武器によって殺傷された人体、頭部のない人体がたくさんあるらしい。弥生時代以降、争い、諍い、殺し合いが頻繁に起こる時代らしい。最近世界のあちこちで爆弾騒ぎ、銃乱射でたくさんの方が亡くなっている。大量殺人がニュースになりやすいので大衆の耳目に届くのか、最近のほんまものの戦争は日々どれぐらいの戦死傷者が出ているのか、一般人や女子供がその中に含まれるのか、知らないけれど知りたいものだ。

人間は自分を守るため、自分たちを守るためなら、人殺しをするのだ。

6:30 大阪を出発。鎖手前の林道で駐車、8:45 に歩き出した。あとから2台きて、何人かの登山者が用意を始めていた。晴れの予報に反して、多少曇り気味。

林道に標識「伊藤新道であい」砂防ダムを左に見て登る。白滝山コース。いくつかの池を経て、鉄塔の下を打見山の方へめざす。伊藤新道を登るのは初めて。流れの横をどんどん登る。梅雨の季節、雨が多かった、流れの音もごうごう、飛沫をあげて騒がしい。地面は湿っているが、さいわいヒルはいない、渡渉もあまりない。中ほどに滝がいくつかあった。りっぱな滝だ。でかいトチノキ、太い幹の半分がコケに覆われ、その木肌はごつごつ神々しい、こんなところに着生欄があるらしい。

ここから先は高架鉄塔、送電線に沿って打見山：琵琶湖バレー・スキー場の方に。送電線沿いに保守点検用の道がある、そいつを利用するのだ。登山道は尾根道、谷道、巻き道と山の形に沿っているが、送電線保守点検用の道は、ひたすらまっすぐ上がったり下がったりだ。下がったところには水が流れている。

◎ノリウツギ・ドクウツギ：ノリは糊の材料だったんだって、よく見かける白い花、きれいな白い花の背の高い草。ドクは、赤い球、日本三大毒、トリカブト・ドクゼリ・ドクウツギだそう。うっかり口の持って行ってはいけないね。

◎アワフキムシ：地面にコイン大の白い泡「なんだこれは」「アワフキムシ」「はじめてみた」セミに似た虫らしい。

◎ツルアジサイとイワガラミ：ともに大きな木に巻き付き上の方で白い花。高いところの白い花は写真ではうまく写らない。陽の反射も白く見えるから。

◎バイケイソウ：水芭蕉風の葉っぱの上に、ひよろり白い散らばった花、よく見るときれいな草だが、毒草らしい。

◎ナツツバキ<沙羅双樹>：赤い椿と花の形は同じだと発見。白い花は地面に散らばっている。それにしてもこの木の幹、木肌は独特。さらにまだ鹿が皮をむいているところ、もう一つ独特だ。

◎ヒメイワラビ：地表に繁茂のシダ類、聞くと、鹿も食わない草、ということはたくさんの鹿がいるのだ。

◎トンボ：夏は避暑に登っているのだそう。秋には里に下りる。赤とんぼだ。

◎今回の山行では鹿の警戒音と猿の姿をたくさん見た。そうそう最後の林道で、1Mぐらい、小ぶりのアオダイショウがのたり、「おおお」「きゃ～」であった。

「スプレー塗料で 木の幹や枝に マークを付けるのは やめてほしい」というのを聞きオレは街中のスプレー落書きを思い出した。アメリカNYでのその落書きが目にとまり、一躍時代の寵児になった画家キースヘリングもいるが、いたるところに描かれた落書き絵画にはうんざりする。「ほっ」と見返りたくなるような落書き絵もなくはないが、街の壁の落書き、描かれている絵はやはりねえ、というよりあれは目の毒だ、悪だ。山の中のマークは「ここが道だよ ここで曲がるのだよ」というマーク、昔も今も赤いビニールテープか、リボンだ。

時間は2時、スキー場リフト下から比良山系縦走路を歩いている。尾根道とはいえ結構な登り、「は一は一」言いながら登っている。曇りだし多少冷たい風が「は一は一」の身体に心地いい。白い夏椿の花が散らばっている。

今日は、坊村林道で車を止め、伊藤新道から池をいくつか巡り、高架鉄塔沿いに打見山：琵琶湖バレーのスキー場まで、これは鉄塔管理用路を架線沿いに上がったり下がったり。そこから縦走路でおなじみ金糞方面へ、木戸峠、比良岳、葛川峠、烏谷（からと）山へ。そこから縦走路を左に折れ、挿鉢山、牛コバと歩いた。10時間近い時間を歩いた、久しぶりの強行軍、最初の2本目ぐらいがきつかった、体力がなくなると実感していたが、徐々に回復、元気でゴールに、やれた、登った、歩いた、と実感。朝5時大阪アトリエで温度30度湿度60%だった。山は木のおかげで陽にさらされることも少なく、しかも1000Mを超えると涼しい風が吹いていた。

ジャン・フランソワ・ビルテール著<莊子を読んで>

◎養生主編：第三：包丁 文惠君の為に牛を解く 手の触るる所 肩の倚（よ）る所 足の履（ふ）む所・・・丁という料理人が王の為に牛を料理した。牛をつかむ、肩をささえる、足を踏む、固定する、人は「houa」と聞いた。舞う如く、奏でる如く、刀をたたくとき、人は「houa」と聞いた。王が「素晴らしい妙技」といえば、料理人は「私は牛を精神で見ます」「すこぶる慎重にふるまいながらゆっくり肉を切り離します」

◎天道編：第十三：桓公 書を堂上に詠む 輪扁 輪を堂下に削る・・・王が本を読んでいた。車大工の扁（べん）が下で車輪を削っていた。大工が王にたずねた。「何を読んでますか」「聖人の言説を読んでいる」「聖人はまだ生きてますか」「死んでいる」「ならば その聖人の滓（かす）を読んでまいすね」王は怒って聞いた「大工の技も 聖人の想いも 言葉では 説明できない 言葉はただの滓なのです」

◎天道編：第十三：聴きて、聞くべき者は、名と声となり、悲しきかな・・・我々が聞きとるのは、言葉と音である。不幸なことは、人は言葉と音によってもものの現実を把握できると思い込んでいる。これは違う。「知覚すれば語らず」「語れば知覚しない」

◎先達扁：第十九：孔子 呂梁を觀る泉水三十仞 流末四十里・・・孔子は、ものすごい水の流れの中で泳いでいる男を見た。「こんなふうに泳ぐ秘訣は？」「与えられた世界から出発し 天性を発達させ 必然に到達している」「私には秘訣はありません」「吾 故に始まり 性に長じ 命に成る」

孔子や儒教は、抹香くさい解釈、教え、導きと、おしきめがましい話、これには近づきたくないと思っていた、敬遠していた、いまだに近づかない。何年か前に「老荘」という名を知った。莊子をいくつか読み、その考え、発想の奇想天外さが面白いときにいった。莊子は二千年以上昔の人、日本に伝えられてからも二千年足らず、幾多の人がその考えを解釈・翻訳・方向付け、「タオ：道」というような名前を付け、親しまれてきたようだ。この本はフランス人が視点を変え、解釈・翻訳・方向付けを捨て去り、莊子が書いた物語の一つ一つを、自由に解釈し理解し楽しんでいる。

料理人の話、車輪造りの話、こんなものは今の日本の社会では、話としては笑止な類、毎日のように面白おかしくメディアで、最高の料理人、最高の職人が出場し、もっともらしいご託宣を能書きを述べている。職人は直接商売とは関係ないので話が朴訥だけれど、オーナーシェフの料理人は話すひとことが客を呼ぶのを知っているから、滑らかにコンセプトをおっしゃる。もっともオレはこの滑らかさは見習わなくては。料理の話、職人の話は題材的には今風ではないが、莊子先生その話の中に面白いことを言っていると感ずる。

孔子は、ものすごい水の流れの中で泳いでいる男を見た。：この話で、孔子大先生の登場の意味がわからないのはさておき、もっとも今の30歳40歳の方々は孔子を知っているのかな。さてものすごい流れの中を泳ぐ男、山を駆けのぼり、宙を舞い、水の中を進む男、「方法も何もない ただ 泳いでいるだけだ」「ここから出発し 天性を発達したらここにきている」という。本当にこんな超人はいないと思う、ならば空想の世界なのか、アニメの世界なのかという結論でもない。オレはこんな物語を読んで、しみじみ楽しんでみたいと思っている。

亀節子：訳者あとがき：私たちは、たくさんの誤謬（ごびゅう）の中で生きている。知識やイメージはもちろん、それらに導かれる感情さえ、時には過ちといることがあるかもしれない。プラトンがいうように「洞窟のイデア」に囚われている私たち人間の宿命であろうが、いつかは、それぞれの形で住処である洞窟を離れる時が訪れる。本書は、従来わたしたちが持っていた「莊子」に対して抱いていた知識やイメージを、その洞窟から脱出させようという一つの試みである。著者ビルテールが、莊子のことを「一人の哲学者の著作 自分自身で考え 自らの固有の経験を問かけ 他者のいうところを熟考し 考えたうえで言語を用いるものの作品」と述べている。「老荘思想」という成語から、わたしたちは、莊子は老子の後輩であり、彼の著作「莊子」もまた「老子」よりも後代に書き記されているとする先入観を抱きやすい。しかし現代の有力な学説では、中国の戦国時代、別個に生み出され、しかも「莊子」は「老子」よりも数十年、数百年先行していたと考えられるようになった。本はまだまだ続く。

◎大宋師扁：第六：顔回曰わく 回は益せりと 仲尼曰わく 何の謂いぞやと 曰わく 回は仁義を忘れたりと 曰わく 可なり なおいまだしきなりと た曰 またまみえて曰わく 回は益せりと 曰わく 何のいいぞやと 曰わく 回は礼樂を忘れたりと 曰わく 可なり なおいまだしきなりと た曰 またまみえて曰わく 回は座忘せりと 仲尼肅然として曰わく 何をか座忘という と 顔回曰わく 肢体を墮（こぼ）ち聡明をしりぞけ 形を離れ知を去りて 大通に同ず 此れを座忘という と 仲尼曰わく 同ずれば則ち好みなくなり 化すれば則ち常なくなり なんじ果たして其れ賢なるかな 丘や請う なんじの後に従わんと・・

顔回言った「私は進歩しました」「どういうことかね」孔子は尋ねた「仁義を忘れました」「それはけっこうだが まだ不十分だね」顔回が再びやってきて「私は進歩しました」「どういうことかね」「礼樂を忘れました」「それはけっこうだが まだ不十分だね」顔回が再びやってきて「私は進歩しました」「どういうことかね」「忘却のうちに座ったままでいられます」「どういう意味かね」「私は自分の 手足を忘れ 視覚・聴覚を追い払い 自分自身のものへの意識をなくし 完全に解き放たれています それが忘却のうちに座ったままでいられるということです」孔子は明言した「もし君に束縛がないなら 君はもはや前もって好感や反感を抱いたりしない」「もし君が現実の変容に同化するなら 君はもはやいかなる拘束も受けない 君はかくして賢者になった この丘も（孔子） 君の弟子になりたいものだ」

◎ビルテール先生：物語はひとつずつ進展している、各段階は、忘却の程度によって示される。弟子の顔回が、仁義を内化し、仁義を忘却する。次に、完全に礼樂に熟達し、礼樂を忘却した。完成に到達したようであるが、師はまだ満足していない。三度目に会った時に逆転が起きている。「忘却のうちに座っていられるようになった」と聞き、顔を引き締め説明を求めた。説明を聞き、師たる姿を見た。莊子においてほとんどそうであるように、対話体の形式がドラマツルギーの役に立っている。狙いは、状況の急転を演出することである。＜略＞実際のところ、彼は、観念の働きやそれらが生み出す影響や変化を誘発する言葉ほどには、観念そのものには興味を持っていない。彼の興味は、たとへば無理解から理解への移行、もしくはその逆の移行を開始するものに寄せられる。仁義が他者との関わりあいにおいて現され、礼樂は外部の現実と結びついた実践的な活動だ。それに対し「忘却のうちに座って」は、自身の内に閉じこもって、他者や外部に背を向けているように思われる。動き回るのをやめることを試みれば、最初はいくつかの困難が生ずるかもしれないが、容易に乗り越える可能なものだ。

◎オレ：莊子の話の中に孔子があらわれる、これのゴタゴタは二千数百年の時のなせる業か、ま、このことは置いておこう。莊子を読むときには、彼がいつている、単語・言葉・言い回し、そういうものに囚われず、物語の展開を楽しみ、独自にその単語・言葉・言い回し、を自分なりに翻訳・解釈していけばいいというように、極端な考え方になってきている。「私は〇〇をした」「〇〇がわかった」「〇〇をみた」そういう〇〇は、物語の中の単なる言葉として捉え、楽しみ、感じる。そして次の展開で「〇〇になった」「〇〇がよかった」「〇〇と感じた」これも物語の中の単なる言葉として捉え、楽しみ、感じる。その中に、〇〇以外のところに、莊子の真骨頂が読める、感じ取れる、楽しめる。これはあまりにも勝手な言い草かもしれないが、オレはこれでいく。莊子が語る「宇宙」「空間」「時間の長さ」「時間の短さ」なんだか現代科学、分子や電子の世界、何億光年の宇宙世界を想わせる。高等生物の人間が、このオレが、賢明なあなたの身体が、単なる膨大な分子の塊である、それこそ感情も思考も記憶も、分子が絡まりあって動き回っているだけ。こういうふうにと考えると、莊子も普通に理解できる、世の中の不思議も、歪みも、何でもありである。

◎ビルテール先生、次にアンリ・ミショー「熟視の到来＜逃れゆくものに向き合って＞」を参考にと：私は、聴いていたもののなかで私の動きとは反対の動きに出会ったところだ。私は、その動きを止めた。・・他者の世界はもはや聞こえなかった、さらば、音楽よ。残ったのは静寂であった。私は動かずにいた。まったく動かずに。機能はもはや機能しようとしなかった。それだけだ。＜略＞思考が戻ってきた。いつもと違う。信じがたいほど、理解力に富んでいた。＜略＞そこに熟視がある。「解きあかされ」広大な光景が、熟視すべく私にたちあらわれた。自然に思われるにはあまりに大きすぎる眺め、もっと多くの要素をとれない、もっと射程の遠い、もっと完璧に照応しあう眺め・・。どうしてそうなったのだろうか？私は、休息していた。＜略＞干渉の喪失に身をゆだねるという休息だった。

「ほおお これはすごい」

「いい絵だ すばらしい」

我が家の近所、万博敷地内に国立民族学博物館がある。アボリジニの絵が展示されているというのでいった。今は無くなったがその隣に、国立国際美術があった。そこで昔、アボリジニの女性作家の絵が展示されたような気がするがその展示会は見そこねた。で今回、アボリジニの絵があるということで、彼らの絵を見るのは初めてだが、真夏のカンカン照りのなか、車でやってきた。ちょっと話は横道にずれるが、最近時間の観念が乏しい、観念などという言葉を使っているが、決して思考の話ではなく、足が遅くなったとか、時間までに約束の場所に着けなかったというような単純な話。先日も我が家から駅前の友人宅、「10分で行けます」といいながら倍の時間がかかってしまった。「いや 待っていないよ」といってくれたが、待たせたようだ。それこそ10歳代20歳代のころは、我が家から阪急電車に飛び乗るのに7分で行けた。走るように歩いて、さっと定期券を見せ、閉まりかけた電車の扉にスリ入り込んでいた。もっとも今は定期券はない、電車のホームが3階になっているというようなハンディはないことはないが、20分の余裕を見て家を出ても、時には遅れそうになりあたふた走ることもある。万博までは30歳代40歳代、自転車で30分ぐらいで着いていた。そこから10分ほど歩けば美術館、博物館があった。まだまだ自転車をおおいに使っているが、万博の反対側に行くのに1時間の時間が必要になってきている。若いころの倍は時間がかかる、若いころなら10分で行けたところは20分、30分で行けたところは1時間と、2倍の法則を自覚しなければ。

さて、アボリジニの絵が見えた、展示室の向こうの方になんだか明るい絵、暗い民族博物館の展示品の壁やらモノやら間をぬって、奥の壁に壁画がかかっている。草間彌生バリの絵、その絵のいいことに気をよくした、満足した。博物館内は写真撮影が許可されているが、この展示会部分は撮影禁止なので、写真が撮れなかったのが残念。描いているおっちゃんおばちゃんの顔は、昔、日本にもこんな顔をした人がたくさんいたと懐かしくなるような顔、鳥飼村や河内の田んぼで、道端で、電車の椅子に腰かけ話しこんでいた人たちの顔だ。この半世紀の間にこんなにも変わるのか、文化文明のなせる業か、まことの話は分からないが、今の日本人は土人、原人的な顔つきの人がいなくなった、と思っているのはオレだけか。アボリジニを検索してみると旧石器時代、5万~20万年前にオーストラリアの内陸部にいた先住民らしい。日本列島には3万年前に人はいたらしいが、詳しいことはわかっていないらしい。5万~20万年前は、まさに石器時代、ヨーロッパに渡ったやつ、アジアに渡ったやつ、アジアから何らかの方法でオーストラリアに渡ったやつ、というような分類になるのだろうが、顔つきは丸く頑丈な感じ、色こそ黒いがアジア系の顔つきだ。決してヨーロッパ系、中東系ではなさそうだ。そんな黒い丸顔のおっちゃんおばちゃんが筆を持ち絵の具を持ち描いている。写真の彼らの顔はしわが深く刻まれ、黒く、怖そうだが、目は小さく細く、ほちよりと宙を見ている。

ただ驚いたことは、中近世にヨーロッパからのイギリス人が入植しての彼らの行動だ。「ここは オレのうちだ オレが 発見した」先住民を迫害、虐殺した歴史がすごい。「ハンティング」という名の遊び、虐殺で先住民はたくさん殺されたらしい。こんな話は世界のどこにでもある、アジアも南北アメリカ大陸も。英連邦なんてかっこいい呼び名だけれど、世界のあらゆるところでヨーロッパ人は、虐殺・略奪・富を盗み・異人種を奴隷化する、これがついこないだまでのヨーロッパ人なのだ。

このアボリジニの絵画、どうもブームのようだ、ネットの中には、アボリジニの展示会、絵の写真が氾濫している。アボリジニの絵画、現代美術の世界で、一つのジャンルになっているようで、知らないのはオレだけだったといまさらながらに驚いている。仕掛人がいたらしく、50年ぐらい前に<アクリル絵の具・キャンバス>で描くことを教えたらしい。元来から人や動物を半具象や抽象的に表現していた彼らに、点描画を教えたらしい。アクリル絵の具の厚塗り点描で、独自の世界が描かれている。それ以前の線描の絵は、今の現代美術とは違うが、アボリジニ独特の模様、線描が目を引き。線や形にはもともと彼らの「記号」であつたらしい。祈り、人、獣、天、川という記号がぐるぐる渦巻いて絵画になっている。オレはその説明がない方が素直に絵に溶け込める。たぶん絵画ということなら、アートということなら、その解説、記号の意味は伏せておいた方がいい。

小雨、霧、これは幽玄の世界だね。山が見えるが霧のなか、そのまた向こうに、山が見えるが霧のなか。川の流れる音、山の中の谷川がざわざわ流れる。向こうの方に山、まわりには木々がたちならぶ。「キッキッ」鳥の声、なんの鳥だか知らないが木々の間を跳ねまわり、命の楽しさを伝えている。季節はもう夏、梅雨が明けたという宣言が、あったかまだかはしらないが、暑い日々が続いていた。今いるところは、北沢峠。4人の仲間と車でやってきた。去年も来たそうで、季節はもう一か月前だそうだ。「あの時は 雨の中 登ったねえ 雷鳥が見られたねえ 霧と雨で 向こうが見えなかったけれど 徐々に晴れてきて 青空と 山々のすごみが よかったねえ そう まだ雪が残っていて 滑りそうになったねえ」そんな話がとびかった。北沢峠は何度も来ている、ここのキャンプサイト、お世話になります。バスを降りたところ、2000Mを超える高所、長袖、半袖のTシャツを重ねて着てちょうどいい快適さ。ここに来るには、伊那ICで高速を降り、市街地で食料品の足りない部分を補給し、仙流荘バス停留所まで来た。「あれれ 2:20分の最終バスに乗れるかな まさか」なんてことで、急いできた。「昼飯は 簡単弁当を買って 車でかじろう」と助六鮎をほおぼった。仙流荘と北沢峠間のバスがあるのを知ったのは最近のこと、それまでは、戸台という村の川の堤に車を止めて、重いザックを担いで、一日かけて峠まで歩いた。ふうふういいながら、河原の砂利を、石を踏んで歩いた。猿も多くいた、猪も見た、1時間、スイスイとバスに乗ると、もうあんな真似はできないと、懐かしい。

7:00 出発。目的地は甲斐駒ヶ岳。昨夜はテントが浸水しそうな勢いの降り方、防水の効いていないテントは下の方が水浸し、衣類が濡れる、シラフが濡れる、いやだなあと思いながらもアルコールの勢いも借りて眠りについた。6時ころもかすかに降ってはいたが、なんとか雨にならずに、途中で降らないで、と願った。テンバからバス停のところにまわりそこから登って、双児山、駒津峰、から甲斐駒ヶ岳へ。帰りは駒津峰から仙水峠と、時計回りに帰る予定。この山はもう十年ぐらい来ていないが、懐かしい思い出がある。澤山・河瀬の三人で、朝から戸台に車を止め、大きな荷を背負い、赤河原分岐を左に折れ七丈ヶ滝尾根を登った。「大丈夫だ 一般ルートだ」澤山さんのこの言葉に「まただ」とぼやきながら、怖いおもいをしてやっと尾根にとりつき、廃屋小屋でテントをはって寝た。恐怖は体力を奪う、もうテント場についたときはヘロヘロだったが、飯はきちんと食べた、酒も飲めたが。渡渉、崖のぼり、ザイルで引き上げてもらう、そんなこんなを思い出し、ああいうところは近づきたくないと思う反面、よかったなという思い出だ。

昨日の雨で地面は湿っているが、空が青くなってきた、ここは一般登山道、急斜面もあるが、はあはあ我慢で高度を稼ぐ。これはカラマツか、電信柱より細いぐらいの針葉樹林帯の中を進んでいく。オレはいつもこういう登りでは、地面を見、自分の足を見、それこそ“からっぽ”になって進む、このからっぽがオレには楽しいのだ、至福の時なのだ。上を見上げると、木々の奥に空が見えだす。「あそこが乗越か 峠か」まもなく着くだろうと思いつつ、右足を見て左足を見て登っていく。虫が鳴く、鳥が鳴く、登る、これが楽しい、これがオレの登山の醍醐味だ。

駒津峰まで登ると、雲のような霧のような霞はかかっているものの、雨の気配もない。ここからは砂と岩の山、緑がほとんどない。これは翌日仙丈から見た山の姿の様子だが、白っぽい岩の山というのが甲斐駒ヶ岳だ。ここは岩稜の山、砂のような土と丸い大きな岩、ところどころに緑のハイマツ、曇っている、白っぽい霧なのか、雲なのか、まわりの景色は見えないが空は青い、日差しもきつい、肌がひりひり感じる。昨夜の寝不足がたたったのか足が重い、ゆっくり岩を超え、滑る砂を蹴り、山頂の祠が見えた。なんだこんなに立派だったのか、古い木がしらんで、祠そのものが少しゆがみ、時代を感じさせる祠を想像していたが、金のような、緑青のような色を感じさせ、麓の神社を思わせるような普通の祠だと思ってしまった。前回、七丈ヶ滝尾根から登って、廃屋山小屋にテントをはり、翌朝、たつぷり雪の着いた、トレースもない尾根道を、これでもか、まだかまだかと、祠までやってきた「おおお 助かった ここからなら帰れる」とひと安心「ありがとう」と心の中でつぶやき、雪に埋もれた祠に向かってぬかずいた。それまでも、山頂までは何度か登っていたので、ここからなら安心して帰れる、助かったと、胸なでおろしたのだ。山頂に「鋸岳5時間」と標識がある。この鋸岳は、オレにとって、近づきたくない山のひとつである。遭難が多発する山だそうだ。

甲斐駒ヶ岳からの下りのルートは、仙水を通ることにした。昔の記憶で仙水の辺り「桃源郷のような 気持のいい景色」と覚えていたが、それがどこだったか忘れていた。どんどん下ってくると下の方に岩が見えだした「ひょっとして あれが オレのいう 桃源郷なのでは」というところか、それとも、栗沢山の辺りだったのか定かでないが、この仙水峠もなかなかいいところ、火山岩が敷き詰められ、緑が濃く、これに白い雪があれば素晴らしい景色だ。昔、5.6人で行った鳳凰三山の縦走、夜叉神峠までの想いでが懐かしい。今日は9時間の行動時間、テンバに戻った。

テンバは、バスを降りて10分。近いので少々重い荷も我慢できるが夏のことなので、腐るものは持ってこれない。初日の晚餐は豚肉の鍋、野菜もたっぷり食べさせてもらった。二日目は、サバの缶詰と野菜の鍋、これまたおつま味。三日目はアルファ米と、レトルトカレー、キュウリにトマト、これも旨かった。初日は雨、テントの中で飯を食べたが、二日目は一瞬パラリときただけで、酒だけテントで飲んだ。三日目も前日同様雨はなかった。呑み助の皆さん、ロング缶のビール3日分12本、焼酎2升、日本酒1升を買った。酒類を全部オレのザックに入れると、さすがに重い、今までで一番重いザックだった。バスの運転手氏に「何が入ってる」と「酒を持たされて」というと「ちょっとここに おいて いて」と笑われた。小さいバスなので、重すぎる、大きすぎるザックは、扱いにくい。

二日目朝6時出発、今日は仙丈だ、昨日は甲斐駒ヶ岳に登れた、今日は小仙丈ぐらいまでしか行けなくても、もう充分楽しめた。昨日、雷鳥を見たかつぶやく青年を見たが、オレたちの前には姿を現さなかった。三泊とはいえ、両方を登りきれるとは思っていない、北岳も考えたが、ここは道中が長すぎるのであきらめた。普通の天気予報、伊那市ではこの二日は晴れマークだったが、山の天気予報、北沢峠は、雨模様、登山には適さない天気だと出ている。昨日も今日も雨はなく、今は晴れている、テンバから仙丈に向かう山の緑が見える、青空が出ている。

3時間ぐらい登ってきた、森林限界が過ぎてきたのか、大きな木がなくなり、背丈より低いハイマツの濃い緑が目の前の小仙丈を上の方までもっさり包んでいる。昨日登った甲斐駒の山容が半分雲に包まれ白く見える、鋸も、北岳もくっきり見える。去年は季節が一月前、山頂まで雨に降られ、寒くてダウンを着ていた。今日は長袖、半袖のTシャツの重ね着でちょうどいい。小仙丈までえっちらのぼった、途中で雲が切れたのか、だれかが「富士だ」と叫んだ。黒い小さい姿がちらりと見えた。夏の季節は人が多い、若者のグループもたくさん見たが、中高年の旅行者のツアーの人たちがたくさん来ていた。前後の案内人らしき人に挟まれ、20人30人の団体が登ったり下ったり、その人たちに遭遇すると、譲り合ったり、追い抜かしたりに時間がかかる。山が好き、自然が好きだけれど、登山のチャンスがなかった、まわりに山好きもいなかった、時間もなかった、という人たちが60歳を過ぎ、ツアーに申し込んでこられている。若者も、中高年も、装備の靴や服や、リュックは新品で格好がいい、オレの装備はいかにも古びて貧相だ。昔、亡くなった阪口さんが「岡村さん きれいな服装になったら 山 一緒にしませんよ」と笑っていた。貧相な格好もバンカラ風味で、これはこれでいいじゃないか、気にしませんぞ。とはいえ、昔、山下さんが、服をいくつかくださった。

仙丈山頂にやってきました。3032Mと書いてある、「いやあ 登れたねえ 二山制覇」なんてどうでもいいが、この歳で、夏とはいえ、ここまで登れた、うれしい限り。バランス感覚、運動神経の低下、岩場の上り下りが怖い、慎重に三点確保でゆっくり通過した。ここも頂上付近は岩の山、こんなゴロゴロ大きな石がどこから降ってきたのか、甲斐駒は白い石、ここは白茶っぽい普通の色、間ノ岳・塩見岳へと続く尾根が見える、少し前に来た両俣小屋は見えないが、この尾根と北岳の間にある、あそこももう一度行ってみたいところのひとつだ。

テンバに戻った、今日も9時間行動、同行していただいた3人もなかなかのツワモノ方である。北沢峠の水は旨い、どんどん流れている、ホースから途切れることもなく飛び出ている。